

示-102 肺癌における重複癌

岡山大学第2外科

○伊達洋至，中田昌男，河田真作，小橋雄一，宮井芳明，森山重治，三宅敬二郎，中野秀治，栗田 啓，清水信義，寺本 滋

岡山大学第2外科に昭和47年1月から昭和62年5月までに入院した肺癌患者785例のうち重複癌39例(5.0%)81病巣を検討した。男女比は24:15，第二癌発生時平均年齢65.6歳であった。臓器別頻度では，胃が11病巣と最も多く，ついで肺8，甲状腺5，子宮4，喉頭3，の順であった。同時性(治療開始間隔が1年未満)のものは9例あり，そのうち甲状腺癌が4例と多く特徴的であった。うち3例には肺および甲状腺に対し一期的手術を施行し合併症はみられなかった。異時性の間隔は1年10ヵ月から20年におよび，平均間隔は8.2年であった。肺先行例は，胃癌後発例の1例のみであり，他は同時性，肺後発例および肺多発例であった。47肺癌病巣の組織型は，腺癌22(46.8%)，扁平上皮癌17(36.2%)，小細胞癌5(10.6%)，大細胞癌3(6.4%)であった。3重癌は3例あり，いずれも異時性で，胃-肺-肺，胃-皮膚-肺，胃-肺-肺であった。異時性重複癌における第二癌発見動機は，検診発見11，第一癌の経過観察中発見7，有症状発見9，その他6であり，検診および経過観察中発見例の3生率は60%，有症状発見例の3生率は10.4%と，有症状例の予後が悪かった。

癌治療に際し，多発癌の発生を考慮し他臓器の検索を行うこと，および経過観察中は転移のみならず重複癌の発生をも考慮する必要があると思われた。

示-104 肺癌を含む重複癌症例の検討

鳥取大学第2外科

○広田 裕，堀尾裕俊，中村広繁，福田幹久，若原秀雄，荒木 威，森 透

目的：近年増加しつつある肺癌を含む重複癌症例に対しその臨床的特徴をとらえるため検討を加えた。

対象：昭和39年より昭和62年6月までに当科で扱った原発性肺癌88例のうち，他臓器原発癌が病理学的に証明された11例(12.5%)を対象とした。重複癌の診断基準としてはWarren & Gatesに準じた。

結果：症例は男性7例，女性4例で3重癌2例，4重癌1例を含んでいた。他臓器癌としては胃癌が7例と最も多く(うち1例胃癌重複)，以下乳癌2例，喉頭癌，肺癌，子宮癌，甲状腺癌，皮膚癌各1例であつた。同一組織型の場合は分化度および組織構築の相違より転移を否定した。1年以内に次癌が発見されたものを同時性とする2例がこれに該当した。残る異時性9例中8例が肺癌後発例であつた。肺癌発見までの間隔は2年より最長29年にわたり，大部分が無症状で胸Xで発見された。また8例が喫煙者で，大部分20才前後より1日20本以上の喫煙歴をもつていた。

考察：第1癌発生後長年月を経て次癌が発生する場合も少なからず認められ，長期にわたる定期的な経過観察の必要性が示唆される。

示-103 肺癌症例における重複腫瘍の検討

群馬大学放射線科

○早川和重，三橋紀夫，中島信明，斉藤吉弘，玉木義雄，中山優子，新部英男

目的：癌治療の成績の向上につれて重複腫瘍の発生頻度も高くなっている。そこで肺癌症例における重複腫瘍患者の特徴と問題点について検討した。

対象：昭和47年から61年に当科を放射線治療の目的で受診した肺癌患者は686例であったが，これらのうち重複腫瘍の認められた37例を対象とした。男女比は男27例，女10例で，平均年齢は67歳であった。肺癌病期はⅢ期以上が27例と多くを占め，組織型では類表皮癌が23例，腺癌9例，小細胞癌1例，不明4例であった。

結果：異時性に重複癌の認められたのは30例で，胃癌10例，子宮頸癌5例，喉頭癌3例，結腸癌3例であったが，喉頭癌との重複癌例はいずれも重喫煙者であった。先に肺癌であった例は2例のみで，1例は再び肺癌の発生がみられた症例である。2番目が肺癌であった症例は28例と大多数をしめたが，このことは肺癌の予後が不良であることが1因と考えられた。照射歴は9例に認められ，子宮頸癌4例，喉頭癌3例であった。胸部に照射されていた症例は，肺癌，乳癌の各1例であり，いずれも肺癌は照射野内の発生であった。最初の照射からは，それぞれ13年と5年経過していた。同時重複癌症例は7例に認められたが，5例が胃癌合併例であった。肺癌に対する治療は異時性重複癌では，他の肺癌症例と比較しても問題なく行われたが，同時重複癌では問題が残った。

示-105 Endobronchial metastasis をきたした皮膚基底細胞癌の2例浜松医科大学第2内科¹，皮膚科²，第1病理³，第2病理⁴

○源馬 均¹，杉浦 互¹，秋山仁一郎¹，千田金吾¹，本田和徳¹，佐藤篤彦¹，山田瑞穂²，森田豊彦³，白澤春之⁴，三浦克敏⁴

皮膚基底細胞癌の転移は極めて稀であり例外的とされている。今回我々はendobronchial metastasisをきたした同癌の2例を経験したので報告する。

症例1：79歳男性，農林業。20歳頃より右腋窩に疣贅を認めていたが昭和51年(71歳時)より増大し，昭和53年に摘出術を施行，基底細胞癌の診断を得た。その後局所再発を反復し昭和59年には頸部リンパ節転移も出現，手術・放射線治療を施行された。昭和60年3月より労作時息切れが出現し両側性胸水を指摘されて内科入院。胸水からは悪性細胞を検出し得なかったがX線断層にて転移と考えられる肺内腫瘤影が示された。さらに気管支鏡にて左主気管支および右中葉気管支に粘膜下結節を認め，前者の生検より基底細胞癌に合致する組織像を得た。

症例2：69歳男性，農林業。昭和56年12月より左内眼角に黒色腫瘍を認め，その後眼瞼腫脹も出現。生検にて基底細胞癌と診断，昭和58年腫瘍切除・眼球摘出を受けた。しかし局所再発を反復し，手術・放射線治療を施行された。昭和60年には肺野多発結節影が出現し，昭和62年3月に肺野影増悪のため内科受診。胸部X線上左肺門腫脹と肺野多発結節影を認めた。気管支鏡にて左上葉気管支に内腔の狭細化を伴う粘膜下結節を認め同部の生検にて基底細胞癌の転移と診断した。